

私は、東京都の練馬区に住んでいる。区の人口は80万人で大都市並みだが、住宅の間にキャベツ畑が広がる土地柄である。

近くに白子川という一級河川の源がある。わずかながら水が湧き出ており、そのあたりは、底の浅い小さな池のようになっている。板張りの通路が設けられていて、子供達が水の中に入り、ザリガニなどを取っている。水辺には、アメンボが浮かんでいる。

源の近くの民家では、地下水をポンプで汲み上げ、自宅の外の壁際に水飲み場を設けている。蛇口をひねると地下水が出てくる。近所の人達がペットボトルに入れて、持って帰っている。この水はまるやかで、お茶にはもってこいだ。割安な料金は自己申告で、蛇口の側の箱に小銭を入れる。

この民家では、地下水を利用して、蛍を飼育している。毎年6月には、自宅の庭と座敷を開放して、蛍を観る会を開いている。座敷の前には池があり、周りに梅や枇杷、柚子等が植えられている。座敷の縁側に座り、池の端を舞う蛍の光を追いかける。幻想的でのんびりした時間が流れる。しかし

今年はコロナ騒ぎで、蛍の会は中止となってしまった。

蛍は主に熱帯から温帯の雨の多い地域に分布、世界中では、およそ2,000種、日本でも40種が生息している。随分種類が多い。

日本で、名の知れるのは、源氏蛍と平家蛍だ。源氏蛍の方が大きく、水の清らかな

変わりしたが、当時は静かな農村だった。甘南備山の裾を流れる井手川沿いには、ほとんど民家が無く水は透き通り、ハスという虹色に光る魚が、すばしっこく泳いでいた。この水を寺の庭の池にも導いていた。

初夏には源氏蛍が川の水辺を舞った。小学生の頃、網の代わりに菜種柄を竹の棒に括り付けて、これを振り回しながら蛍を捕まえた。近くの畑から葱を数本採ってきて、その中に入れた。蛍を手にとると、なんとも言えない異様な匂が指先に残った。葱の筒の中で、時々青い光を放った。持ち帰り蚊帳の中に放った。蛍は一晚、蚊帳の中で光り続けた。その蛍も、田んぼに殺虫剤を撒くようになってから、すっかり姿を消した。

私達の生活も随分便利になった。しかし、それと引き換えに、昔ながらの風情ある姿は失われた。

コロナ禍で社会の活動がストップし、ガンジス川等の水質が良くなり、空気がきれいになったという。果たして、今まで通りの経済発展中心の生活を続けて行ってよいものか、コロナ禍を通じて考えさせられるこの頃である。

都内の河川の源と蛍

坂本 弘道

(さかもと ひろみち)

東京都在住

地域に生息する。平家蛍は、小柄で、水が少しよどんでいても大丈夫だ。源氏蛍や平家蛍は前の年の夏に産卵し、幼虫はカワニナ等を食べて成長する。初夏には成虫になり、光を放ちながら舞う。成虫の寿命は1から2週間とはかない。

私は京都と奈良の間にある京田辺市の寺で生まれた。今でこそ学園都市やゴルフ場が近くに出来すっかり様